

翌年早くも小作争議となった。昭和5年下井河村(井川町)の係争地に施肥しようとする地主側人夫を押しつけるために、一日市・面潟の農民まで動員されたりしている。昭和13年には一日市小作組合幹部5人が逮捕される一幕もあった。

新生八郎潟町

昭和20年4月大火があり、一日市町598戸・面潟村94戸を焼失した。第2次大戦後は文字通り灰の中からの復興である。農地改革で595町歩の小作地が開放されている。新生八郎潟町誕生のとき、五城目町との間に合併をめぐる意見が対立し、昭和33年当町内の浦横町・岡本・野田および浦大町字小立花・鏡沢地区が五城目町に分町することになった。昭和32年八郎潟干拓工事が始まり、筑紫岳の石材が大量に工事に使用されている。干拓により当町は444haの増反配分を受けた。農業が中心産業であるが、交通網の整備により近年の商工業振興もめざましいものがある。

史跡・文化財

県指定無形文化財に一日市願人踊、史跡に浦城址・押切城址、三倉鼻がある。

〔参考文献〕

八郎潟町「八郎潟町史」(昭52)、一日市小学校「一日市村郷土誌」(大9)、小野金治「面潟村郷土誌」(昭11)、(岩見誠夫)

(1980.3出版 角川日本地名大辞典 5 秋田県)

3. 八郎潟町

(名前の由来は)一日市町と面潟村が合併した際に、ともに八郎潟湖畔に位置していたためである。

(秋田の地名研究会 石川雄造)

4. 潟(かた)呼称の変遷

「八郎潟」呼称が定着したのは享和2年(1802)、伊能忠敬が幕府測量方として「大日本沿海輿地図」に「八郎潟」と記入してからであろう。

古くは天明期頃(1781~1788)、江戸の津村淙庵が「雪のふる道」に「水うみは八郎かたといふ。昔、かたの八郎といふ人、生きながら神にありて此みずうみをひらきて住みはじめしよりかく名づけた

るぞ」とあり、また、菅江真澄が「雪の道奥雪の出羽路」に「くにうどは八郎瀨といふ」と見え、土地の人々は伝説八郎太郎にまつわる呼称「八郎瀨」と言い伝えていたものと考えられる。

このような伝説を修験者が三湖物語に仕上げ語り継がれたものと思う。また、土地の漁師達は天王町大崎と馬場目河口を結んだ北西を大方(おおがた)、南東を小方(こがた)と呼んでいた。

大方は今の八郎潟村の地域に相当する地域であり、また鎌倉時代の「大方」に比定され、八郎潟村の村名は歴史的背景のあるなじみのある名称と想うのである。

(秋田の地名研究会 門間光夫)

はとがさき

八郎潟町真坂 はとがさき 鳩ヶ崎

ばばめ がわ

ばばめ
馬場目川 (五城目町・八郎潟町)

「ばばのめがわ」ともいう(地名辞典)。八郎潟の東部、南秋田郡五城目町と八郎潟町を流れる川。

馬場目岳(1,037m)に源を發し、落合で^{おおくらまた}大倉又沢と合流して北流する。杉沢付近で曲流・蛇行しながら西流する。荷背ノ峠付近で、南北に走る断層線を横切するため、狭隘部ができる。五城目町で富津内川と合流、下流では大川とも呼ばれ馬場目川三角洲を緩流し、八郎潟調整池に注ぐ。

古名も^{おおかわ}大河と称し、流域の地名も大河と呼ばれた(三代実録)と認められる。流路延長17・4km、流域面積41km²の2級河川。川名の「ババ」は崖を、「メ」は狭い場所を意味する(地名の語源)。上流に滝や溪谷があり、流域はスギ・ブナ・ナラの原生林に覆われている。杉沢には県営の発電所がある。中流の蛇行帯では、段丘上に集落が立地。下流部は水田単作地帯を形成している。